

皆様

その5お届けします。

8月の東京は暑かったですね。

申し訳ありませんが、こちらで涼しさをたのしんでいます。

今日の授業では、学生に竹島と尖閣の問題を話し、領土問題の難しさと
何故日本と中国、日本と韓国が(EU)のように仲良くやっていけないかを話しました。

先週 EU を話したので、「それに比べて極東ではねー」と対比させたわけです。

先生稼業も色々工夫が必要です。

来週は米国大統領選挙と米国の力について話します(国際事情の講義)。

増淵 文規

英国ダラム便り (その5)

[バイユーのタペストリー]

フランス・ノルマンディーのバイユーに行ってきました。11世紀にまでさかのぼるバイユー教会を中心とした中世の面影を色濃く残す美しい町です。カーンから23kmのところであり、幸い第2次大戦で爆撃から免れています(カーンは大爆撃でほとんど破壊されました)。ここの資料館にあるタペストリー(Tapisserie de Bayeux)を見るのが主な目的で5月にも行っています。ノルマンディー公ウィリアムによるNorman Conquestの顛末を綴ったタペストリー(実際は麻布に刺繍をしたもの)が展示されています。1066年のNorman Conquestの直後にウィリアムの義弟でバイユー司教だったオドンが作成を命じたとのこと。縦50cmで横の長さは70mもある大歴史絵巻で、資料館の横長楕円形の壁をぐるり回る形で展示されており、部屋は暗く展示のタペストリーが浮かびあがるような照明で、保存が良くとてもきれいですし、何しろ戦闘絵巻ですから見学者を圧倒する迫力です。戦いに至る経緯からヘイスティングスでアングロ・サクソンのハロルド王を打ち破るまでの物語で、兵服、武具、船隊、戦争の場面だけでなく、当時の庶民の暮らしぶりや食事の様子なども刺繍されています。刺繍の色はほとんど褪せておらず、1000年近くも前のものとは思えないその姿に大変感動しました。

この絵巻によればウィリアムはアングロ・サクソン人である先代の王様エドワードから「次

は「お前が英国王」と言われていて、ハロルドもそれを認めていながら、エドワード死後ハロルドが王位を篡奪しました。ウィリアムはエドワード先代王との誓約を守るために卑怯な裏切り者を打ち破るべく正義の戦いを行った。そのようにウィリアムに都合のよいストーリーになっています。エドワードはウィリアムのいとこで、若いころに長いことノルマンディーのウィリアムの父親のもとで亡命生活を送り、ウィリアムと仲が良かったことは間違いないようです。

ウィリアムはヘイスティングスでの勝利のあと北上、ロンドンに拠点を構え全国制覇に乗り出します。実際に本人がダラムまで上ってきたかはわかりませんが、側近の大部隊がダラムを平定し、すぐに砦（ダラム城）とダラム大聖堂の建築に取り掛かります。ダラム大聖堂はノルマン様式建築として有名ですが、要はフレンチ・ロマネスク建築です。ノルマンディーで盛んだった建築様式をそのまま持ち込んだことは間違いなく、ひょっとしてバイユー教会も似ているのではと期待していましたが、バイユー教会は後年改築されたゴシック様式が勝っていて、残念ながら類似性は感じられませんでした。ノルマンディーの他の教会を回ってみようと思っています。私のバイユー詣はノルマン・ダラム大聖堂の町に住む者としてのルーツめぐりみたいなのがあります。

ノルマンディー公ウィリアムの祖先はヴァイキングですが、このころのヴァイキングはヨーロッパ中を荒らし回りものすごく恐れられていたようです。沿岸だけでなく川を何百キロも内陸にさかのぼっていく。セーヌをさかのぼってパリを荒らすのに手を焼いたフランス王がノルマンディーの領地を与えたのが、ウィリアムの祖先です。ウィリアム家は英国を征服しただけでなく、その一族（あるいは部下）は南イタリアに両シチリア王国をこしらえています。私の高校の世界史では両シチリア王国のことをきちんと教えてくれませんでしたので、長いこと名前を知っているだけの存在でした。南イタリアの戦乱で傭兵として入ったノルマンディー人（ノルマン）が南イタリアとシチリアにまたがる王国を作ってしまったということですね。かなり最近のNHK放送大学講座でこの辺の歴史講義がありました。放送大学講座はなかなか役に立ちますね。シチリアはその昔ギリシャの植民がすすみ、その後アラブ文化の強い影響を受け、そこへノルマンがキリスト教ラテン文化を持ち込んで世界でも珍しい独特の文化が醸成されたようです。特にパレルモの教会にその痕跡が多く残っているとのこと。当時の絢爛豪華なモザイクがあるとのこと、近々行かねばなりません。欧州暮らしの楽しみの一つです。

バイユーに戻りますが、ここはノルマンディー上陸作戦で有名なオマハ・ビーチから10kmくらいに位置します。連合軍上陸後最初に開放された町で、1944年6月にド・ゴールが有名な演説を行った広場が今でも観光名所となっています。上陸作戦の際の連合軍戦没者の墓が町中にあります。4,500人程度の兵隊の墓ですが3,000以上は英国兵並びにコモンウェルス友邦国家の兵隊だそうです。ハリウッド映画の影響で連合軍は米

兵中心と思いこんでいましたので、この英国兵死者の数には驚きました。もちろんフランスを助けるためではなく、自分たちがナチスを破る戦いであったわけですが、フランス人から見れば命をかけて自分たちを助けてくれたことになるはずです。

ウィリアムにはじまり、次のプランタジネット朝もれっきとしたフランス人の王様（アンジュー伯）で、王様と貴族は300年くらいはフランスを話していた国が、その後はフランスと戦争ばかりしてきたことを思ってしまう。今でも英国人のシニアの中にはフランス嫌いが結構多い。フランス人も英国人をバカにするのが大好きです。気が合うとはとても思えませんが、根っこの部分でお互いを認め合い、敬意を払っているのだと思います。英仏関係は面白い。隣なのに色々違います。私はダラムの英国人社会の中で「フランス派」であることを、かなり強く出しています。どう思われているのでしょうか？

2012年9月16日

増淵 文規